シンガポールの英語（2）

—シングリッシュと“Speak Good English”運動—

小野　礼子

はじめに

本稿では、「シングリッシュ」として知られている口語シンガポール英語及び、シンガポール政府が2000年から推進している“Speak Good English”運動について考察する。まず、口語シンガポール英語の発音、文法、語彙の特徴について述べる。次に口語シンガポール英語に対するシンガポール政府やシンガポール人の言語態度（language attitude）及び“Speak Good English”運動について考察する。

1. 口語シンガポール英語の特徴

前稿（小野, 2006）で述べたように、シンガポール英語は主として二つの社会言語学的アプローチによって捉えることができる。一つは、シンガポール英語を三つの下位変種の連続体（lectal continuum）として捉える方法であり、もう一つは、シンガポールでの英語使用状況をダイグロッシア（diglossia）として捉える方法である。前者は、シンガポール英語には話者の教育レベルと社会・経済的背景に関連して、上層語（acrolect）、中層語（mesolect）、基層語（basilect）の三つの下位変種があり、教養のある人々によって話される最も威信の高い上層語から、教育をほとんど受けていないか、まったく受けていない人々が話す最も威信の低い下層語までが連続体をなして存在するという考え方である（Platt and Weber, 1980）（Alsagoff

and Ho, 1998; Wee, 2004a参照)。後者は、シンガポール英語には社会的威信の高いH変種（High variety; H-variety）と威信の低いL変種（Low variety; L-variety）の二つが存在し、各々の変種が場面・状況等によって使い分けられているという考え方である（Gupta, 1994）（Wee, 2004a参照)。

本稿では上述の二つのアプローチのうち、後者に従い、シンガポール英語をH変種とみなされる標準シンガポール英語（Standard Singapore English）とL変種とみなされる口語シンガポール英語（Colloquial Singapore English）の二つに分けて考察する。標準シンガポール英語は、標準イギリス英語等の標準母語変種と発音においてやや異なるが、文法的にはほとんど変わらない。これ対し、口語シンガポール英語は特に発音、文法において、標準母語変種とはかなり異なる。次の例は同じ内容を標準シンガポール英語（SSE）と口語シンガポール英語（CSE）で表したものである。

SSE

You had better do this properly. If you don't, you may get told off. And since you are always asking her for favours, you should at least do this properly for her. You should! You cannot do it like this. Do it again. Come, let me help you.

Two people can finish this job very quickly. One person will not be able to do it as fast. You see, we're almost done. Wow, when she sees this, she'll be very happy. We will definitely get a very big present from her this New Year.

CSE

Eh, better do properly, lah. Anyhow do, wait kena scolding. And then, you always ask her for favour, and still don't want to do properly. Must lah. Like that do cannot. Do again. Come, I help you.

Two people do, very fast finish. One person do, not so fast. You see, almost finish. Wah, she see this, she will be very happy. Then we get big angpow for sure this New Year!

(Alsagoff and Ho, 1998: 129)

この例から、標準シンガポール英語は標準イギリス英語のような標準母語変種と大差はないが、口語シンガポール英語とはかなり異なることがわかる。したがってここでは、標準母語変種とは大きく異なる、「シングリッシュ」(Singlish) としてよく知られている口語シンガポール英語に焦点を当て、その発音・文法・語彙の特徴をみることにする。

1.1. 発音

まず、口語シンガポール英語 (CSE) の発音の主な特徴について、標準イギリス英語の発音型として知られる「容認発音」(Received Pronunciation: RP) と比較対照しながら述べる。

1.1.1. 語頭の閉鎖音

RPの閉鎖音 /p/, /t/, /k/ は、pan, team, kinのように語頭に現れると気音[^{h}]を伴い、それぞれ[p^h], [t^h], [k^h]となるが、span, steam, skinのように、/s/の後に現れると気音が消える。したがって、たとえば、panとspanは[p^{h}æn], [spæn]のように発音される。これに対してCSEの /p/, /t/, /k/ は現れる位置に関係なく無気音となるため、panとspan、 teamとsteam、kinとskinの各組に含まれる閉鎖音はそれぞれ同じように気音を伴わずに発音される (Bao, 1998; Wee, 2004a)。

1.1.2. 母音直前及び語末の歯摩擦音

RPの歯摩擦音/θ/, /ð/は、CSEの場合、母音の前では/t/, /d/となり、語末で

は/f/となる。したがって、thinとthisは、RPでは/θɪn/, /ðɪs/と発音されるが、CSEでは/tin/, /dis/となり、healthとhealthyは、RPでは/helθ/, /helθi/と発音されるが、CSEでは/helf/, /heltɪ/となる（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

1.1.3. 母音の長さ

RPには五つの長母音 /iː/, /uː/, /ɔː/, /ɑː/, /ɜː/ があるが、CSEには母音の長短の区別がなく、/iː/と/ɪ/はどちらも/i/と発音され、同様に/uː/と/ʊ/は/u/、/ɔː/と/ɒ/は/ɔ/、/ɑː/と/ʌ/は/ɑ/と発音される。したがって、CSEでは、たとえばbeatとbit、caughtとcotはそれぞれ最小対語（minimal pair）ではなく同音異義語となる（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

1.1.4. 音節鼻音と音節側音

button /bʌtn/, mutton /mʌtn/, whistle /wɪsl/, bottle /bɒtl/のような語に含まれる音節鼻音や音節側音はCSEにはなく、/ə/が挿入されて/bʌtən/, /mʌtən/, /wɪsəl/, /bɒtəl/のように発音される（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

1.1.5. 語末に現れる有声音の無声化

語末に現れる有声音/b/, /d/, /g/, /dʒ/, /v/, /z/, /ʒ/は、CSEでは無声化し、次のように発音される（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

	RP	CSE
tab	/tæb/	/tɛp/
head	/hɛd/	/hɛt/
leg	/lɛg/	/lɛk/
judge	/dʒʌdʒ/	/dʒʌtʃ/
alive	/əlaɪv/	/əlaɪf/
news	/njuːz/	/njus/
beige	/beɪʒ/	/beɪtʃ/または/beɪʃ/

1.1.6. 語末にくる閉鎖音の削除

語末の閉鎖音は、その前に別の子音がくると次のように削除される（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

	RP	CSE
limp	/lɪmp/	/lim/
list	/lɪst/	/lis/
cent	/sɛnt/	/sɛn/
stand	/stænd/	/stɛn/
stink	/stɪŋk/	/stiŋ/
mask	/mɑːsk/	/mɑs/

1.1.7. 音位転換

一つの語の中で、隣接する二つの音の位置が入れ替わることを音位転換（metathesis）という（Richards, Platt, and Weber, 1985）。CSEではこの現象が語尾子音群/sp/にみられる（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

	RP	CSE
lisp	/lɪsp/	/lips/
crisp	/krɪsp/	/krips/
grasp	/grɑːsp/	/grɑps/

音位転換は語尾子音群/sp/の場合にのみ生じ、lastやmaskに含まれる語尾子音群/st/や/sk/に関しては、1.1.6で述べたように最後の閉鎖音が削除される（Bao, 1998; Wee, 2004a）。

1.1.8. 語強勢のパターン

語強勢のパターンをみると、CSEでは下の(a)群の語のように、（第1強勢、第2強勢等の区別がなく）どの音節にも均等に強勢が置かれる場合がある。

たとえば、celebrationという語の場合、RPではbraの音節に第1強勢が置かれるが、CSEでは、四つの音節に同等の強勢が置かれる。これはCSEの発話リズムが強勢拍リズム（stress-timed rhythm）ではなく、音節拍リズム（syllable-timed rhythm）であることから起こるといわれている。また、(b)群の語のように、RPでは強勢の位置の違いで品詞を区別することがあるが、CSEではそのようなことは起こらない。したがって、たとえば、RPではincreaseは動詞の場合と名詞の場合とでは第1強勢の位置が異なるが、CSEでは動詞の場合も名詞の場合も同じように発音される。さらに、(c)群の語のように、CSEでは第1強勢の位置がRPとは異なる位置に置かれる場合が多い（Bao, 1998; Wee, 2004a）。(c)群のeconomicとacademicに関しては、名詞形のeconomyとacademyの第1強勢の位置はCSEでもRPと同様に第2音節に置かれるため、CSEでは名詞形の第1強勢の位置が形容詞形においても維持されると考えられる（Bao, 1998）。

	RP	CSE
(a)	cele'bration	'ce'le'bra'tion
	anni'versary	'an'ni'ver'sa'ry
(b)	in'crease（動詞）	'in'crease（動詞・名詞）
	'increase（名詞）	
	com'ment（動詞）	'com'ment（動詞・名詞）
	'comment（名詞）	
(c)	'faculty	fa'culty
	'calendar	ca'lendar
	'character	cha'racter
	eco'nomic	e'conomic
	aca'demic	a'cademic

1.2. 文法

次に、口語シンガポール英語（CSE）の文法的特徴について述べる。上述

のように、標準シンガポール英語は標準イギリス英語等の標準母語変種と文法的に大差はないため、これらを区別せずに標準英語（StdE）とし、これと比較対照しながらCSEの文法的特徴をみることにする。

1.2.1. 文末小辞lah

CSEの特徴として非常によく知られているものにlah, ma, hah, meh, leh, lor, hor, watといった文末小辞がある。これらの中で最もよく用いられているのがlahである（Wee, 2004b）。lah（laとも書く）は、中国語の一変種である福建語に由来するといわれているが、はっきりしたことはわかっていない（本名・田嶋・榎木薗・河原, 2002）。他の文末小辞と同様に、lahの使用は統語的には任意であるが、語用論的に重要な役割を果たしている。Wee（2004a）は、lahは連帯標識（solidarity marker）としての役割を担っているが、それとともに、フェイスを脅かす行為（face-threatening acts）[1)]がもたらす影響力を和らげる働きもすると述べている。下の（1）から（3）は、インターネット版の*Oxford English Dictionary*（2000）（Wee, 2004b参照）に掲載されているlahの例文である。*Oxford English Dictionary*では、lahは話し手の気分や態度を表すために種々のピッチを伴って用いられる小辞と定義されており、（1）は強い否定、（2）はいらだち、（3）は説得を表すと説明されている。これに対してWee（2004b）は、（1）は否定、（2）は強い主張を表すと説明し、否定や強い主張は聞き手の積極的フェイスを脅かす行為であるが、lahがつけ加えられることで（1）の場合は無礼さが大幅に軽減され、（2）の場合はlahがない場合よりも丁寧になると述べている。また、（3）は依頼を表すと説明し、依頼は聞き手の消極的フェイスを脅かす行為であるが、（2）と同様にlahをつけることで、lahがない場合よりも丁寧になると述べている。そして、上述の*Oxford English Dictionary*の定義と合わせ、lahは聞き手に話し手の気分や態度に気づかせる‘attention getter’的な役割を果た

しながら、同時に聞き手に話し手のそうした気分や態度の受け入れを求める役割も果たす文末小辞であると説明している。

(1) No lah.
(2) Wrong lah.
(3) Come with us lah.

また、本名他（2002）は、lahは日本語の「よ」「ね」「さ」といった終助詞にあたり、(4) から (6) のように使われると述べている。

(4) OK lah.（オーケーだよ）
(5) Wait lah.（ここで待っててね）
(6) Easy lah.（簡単さ）

1.2.2. 動詞の屈折の不在

動詞体系の単純化もCSEの大きな特徴である（石黒, 1992）。たとえば、CSEでは動詞は屈折しない（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b; 石黒, 1992等）。そして、(7) から (9) のようにyesterday, always, already等の時を表す副詞が時制や相を表す動詞の屈折の代わりに用いられる。ただし、進行相の場合は、(10) のように形態素-ingが動詞に付くことが多いが、この場合でも助動詞beは用いられず、副詞stillがよく使われる（Alsagoff and Ho, 1998）。

(7) She eat here yesterday.
(StdE: She ate here yesterday.)
(8) He always go market with his sister.
(StdE: He always goes to the market with his sister.)
(9) She eat her lunch already.
(StdE: She has eaten her lunch.)

(10) Don't disturb them, they still studying.
(StdE: Don't disturb them; they are studying.)

1.2.3. 主語と動詞の不一致

StdEでは三人称単数の主語は動詞の単数形を伴い、複数の主語は動詞の複数形を伴うが、CSEにはこのような主語と動詞の数の一致（number concord/agreement）がみられない場合が多い（Wee, 2004b; 石黒, 1992）。したがって、（11）のように主語が三人称単数でも動詞は単数形にならない（Wee, 2004b）。

(11) The teacher shout a lot.
(StdE: The teacher shouts a lot.)

1.2.4. be動詞の省略

CSEでは（12）から（14）のように、動詞のbe（連結動詞beや存在を表すbe）がしばしば省略される（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b; 石黒, 1992）。

(12) She very nice.
(StdE: She is very nice.)
(13) That girl my sister.
(StdE: That girl is my sister.)
(14) Tom in the room.
(StdE: Tom is in the room.)

1.2.5. 主語・目的語の省略

CSEではしばしば（15）、（16）のように、主語と目的語の両方が省略されたり、主語、動詞のいずれかが省略されたりするが、この現象は状況から省

略されているものが判断できるときに起こる（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b）。Platt and Weber（1980）（Alsagoff and Ho, 1998参照）は、これを中国語の影響によるものであるとみている。

(15) Always late!
(StdE: You are always late!)

(16) Must buy for him, otherwise he not happy.
(StdE: We must buy a present for him, otherwise he won't be happy.)

1.2.6. WH疑問文

StdEのWH疑問文では、疑問詞は通常、文頭に置かれるが、CSEのWH疑問文では、(17)、(18) が示すように、疑問詞は（文頭に移動させることなく）もともとの位置に置かれる（Wee, 2004b）。

(17) You buy what?
(StdE: What did you buy?)

(18) This bus go where?
(StdE: Where is this bus going?)

1.2.7. Yes/No疑問文

CSEのYes/No疑問文は、StdEで行われる主語と助動詞の倒置のかわりに、(19)、(20) のように、文末にor not?をつける場合が多い。また、聞き手に許可を求めたり、可能性を尋ねたりする場合は、(21) のように、文頭にcan、文末にor not?を用いたり、(22)、(23) のように、文末にcan or not?をつけたりする。この場合の聞き手の返事は肯定であればCan、否定であればCannotとなる（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b）。

(19) The food good or not?
(StdE: Is the food delicious?)

(20) You busy or not?
(StdE: Are you busy?)

(21) Can go home or not?
(StdE: Can I go home?)

(22) I want to go home, can or not?
(StdE: Can I go home?)

(23) Answer the question, can or not?
(StdE: Do you know the answer to the question?)

1.2.8. 付加疑問

CSEの付加疑問は（24）から（26）に示されているように、先行する節の主語、動詞・助動詞、先行する節が肯定か否定かといったことに応じて様々に変化することなく、常にis it?となる（Wee, 2004b; 石黒, 1992）。また、(27)のようにisn't it?が用いられることもあるが、is it?は聞き手の答えがyesになるかnoになるかの予測がつかない場合に用いられるのに対し、isn't it?は話し手が聞き手からの答えを予測しているときに用いられる（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b）。ただし、isn't it?についてWee（2004b）は、話し手が先行する節に表されていることを正しいと思い、聞き手もそれに同意してくれるであろうと予測している場合に用いられると説明しているのに対し、Alsagoff and Ho（1998）は、話し手は先行する節に表されていることを正しいと思っているが、聞き手がそれに同意しないのではないかと予測している場合に用いられると述べている。

(24) He watching television, is it?
(StdE: He is watching television, isn't he?)

(25) They not watching television, is it?
(StdE: They are not watching television, are they?)

(26) They come here yesterday, is it?
(StdE: They came here yesterday, didn't they?)

(27) They come here yesterday, isn't it?
(StdE: They came here yesterday, didn't they?)

1.2.9. 可算名詞と不可算名詞

CSEでは、luggages, furnituresのように、不可算名詞を可算名詞として扱う傾向がある（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b）。また、これとは逆に（28）のticketのように、StdEではticketsとなるところに複数を示す形態素-sがつかない場合もある。Alsagoff and Ho（1998）はこれについて、StdEでは常に可算名詞として扱われるものがCSEでは可算名詞と不可算名詞の両方に扱われることがあると説明している。彼らによると、たとえばticketは、fourやmany等の数量詞を伴うと屈折してticketsとなるが、（28）のように単独で用いられると屈折しないという。したがって、CSE話者は（29）のような言い方はするが、（30）のような言い方はしないと述べている。（*は容認不可を示す。以下同様）

(28) She queue up very long to buy ticket for us.
(StdE: She queued up for a very long time to buy tickets for us.)
(29) Her brother very rich－got four cars!
(StdE: Her brother is very rich and owns four cars.)
(30) *Her brother very rich－got four car!
(StdE: Her brother is very rich and owns four cars.)

1.2.10. oneが用いられる関係詞節

CSEの関係詞節には、（31）、（32）のように動詞が屈折していないことを除きStdEと変わらない形と（33）、（34）のようにStdEとはかなり異なる形がある。後者の場合、関係代名詞にはoneが用いられ、関係詞節の最後に置かれる（Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b）。そして、StdEと同じ関係代名詞（who, that）は、StdEの場合と同様に常に関係詞節の頭に置かれ、関係

代名詞としてのoneは常に関係詞節の最後に置かれるため、(35) や (36) の関係詞節はCSEでは受け入れられないことになる (Wee, 2004b)。

(31) That boy who pinch my sister very naughty.
(StdE: That boy who pinched my sister is very naughty.)

(32) The cake that John buy always very nice to eat.
(StdE: The cake that John buys is always delicious.)

(33) That boy pinch my sister one very naughty.
(StdE: That boy who pinched my sister is very naughty.)

(34) The cake John buy one always very nice to eat.
(StdE: The cake that John buys is always delicious.)

(35) *That boy pinch my sister who very naughty.

(36) *That boy one pinch my sister very naughty.

1.2.11. 文頭の目的語

CSEの語順は基本的にはSVOであるが、(37) のように目的語が文頭に置かれることがよくある (Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b)。この特徴に関して、Platt and Weber (1980) (Alsagoff and Ho, 1998; Wee, 2004b参照) は、文において新しい情報を担う焦点 (focus) が文頭に置かれているとしているのに対し、Alsagoff and Ho (1998) やWee (2004b) は、古い情報を担う話題 (topic) が文頭に置かれているとしている。Alsagoff and Ho (1998) は、このように古い情報が文頭にくる形は中国語の文構造の影響であると述べている。

(37) Certain medicine we don't stock in our dispensary.
(StdE: We don't stock certain medicine in our dispensary.)

1.2.12. 反復語法

CSEの文法的特徴として最後に反復語法を挙げる。CSEには名詞、形容詞、

動詞を反復させる形がみられる。これは中国語、マレー語、タミル語が影響しており、程度、頻度、様態等の副詞的意味を表す働きをしている（本名, 2002)。(38) では名詞boyが繰り返されているが、この反復は親密さを表すもので、boy-boyはboyfriendやsonを意味する。(39) のRy-Ryは人名Henryの第二音節のみを反復させたものであるが、人名の反復は単一音節のみに適用されるため、(40) のような反復はみられない。このような人名の反復は親しい友人に対して用いられる。(41)、(42) では形容詞が反復されることによって、その意味が強められている。動詞の反復には一回の反復と二回の反復があり、(43) のように一回の反復（stop-stop）は動作が比較的短い間行われることを表し、(44) のように二回の反復（stop-stop-stop）は動作が長い間続けて行われることを表す（Wee, 2004b)。

(38) Where is your boy-boy?
(StdE: Where is your boyfriend/son?)

(39) I'm looking for Ry-Ry.
(StdE: I'm looking for Henry.)

(40) *I'm looking for Henry-Henry.

(41) Don't always eat sweet-sweet things.
(StdE: Don't always eat very sweet things.)

(42) I like hot-hot curries.
(StdE: I like very hot curries.)

(43) No traffic police . . . stop-stop a while.
(StdE: There is no traffic officer here . . . make a short stop a while.)

(44) Take bus no good, always stop-stop-stop.
(StdE: Taking a bus is not good; a bus keeps on stopping.)

1.3. 語彙

1.1及び1.2では、口語シンガポール英語の発音と文法における主な特徴について述べたが、最後に、口語シンガポール英語だけでなく、標準シンガ

ポール英語においても使用される主な語彙について述べる。したがって、ここでは、口語シンガポール英語（CSE）と標準シンガポール英語（SSE）を区別せず、シンガポール英語（SE）全般にみられる語彙のうち、主なものを取り上げる。

1.3.1. 英語の母語変種にはみられない語

まず、標準イギリス英語や標準アメリカ英語等の標準母語変種にはみられない語について述べる。これにはkiasuやangkatが挙げられる。(45) のkiasuは中国語の一変種である福建語からの借用語で、負けず嫌いの人のことをいうときに用いられる。(46) のangkatは「持ち上げる」という意味のマレー語から借用されたことばで、SEでは「人の機嫌をとる」という意味で使われる（Wee, 1998)。また、(47) のamahはポルトガル語のamaから借用された語で、もともとは中華系の乳母やメイドを意味していたが、現在では中華系以外の女性に対してもこの語が用いられる（Platt and Weber, 1980)（Wee, 1998参照)。

(45) Ali is a very *kiasu* person.
(46) The boss likes him because he knows how to *angkat*.
(47) I always speak Cantonese to my *amah*.

このほか、中国語からの借用語にはtowkay（富裕な実業家)、samseng（悪党、ごろつき)、ang moh（'Caucasian' 白人)、hongbao（お年玉袋)、cheem（難解な）がある。towkayとsamsengはもともと中華系の人に対してのみ使われていたが、最近では、インド系やマレー系の人など、中華系以外の人に対しても使われるようになってきた。マレー語からの借用語にはhantam（当てずっぽうの推測をする)、bedek（はったりでだます)、tahan（耐える）などがある（Wee, 1998)。

1.3.2. 英語母語変種の語の意味が狭められて用いられている語

次に、標準イギリス英語や標準アメリカ英語等の標準母語変種においても用いられている語であるが、SEでは意味が狭められて用いられているものを挙げる。たとえば、標準母語変種で「行商人」を意味するhawkerは、SEでは食べ物を売る人のみを指し、他のものを売る人のことはhawkerとは言わない（Wee, 1998）。そして、（48）のようにcentreを伴ったhawker centreは、屋台のような小さな店が集まるフードセンターのことを意味する（本名他, 2002）。

(48) Let's go to *hawker centre* tonight.

また、batchは母語変種では「群れ・束」を意味し、人と物の両方に使用されるが、SEでは（49）、（50）のように、主に人に使用される（Platt and Weber, 1980）（Wee, 1998参照）。

(49) We've just had a new *batch* of students.

(50) We have a *batch* of girls promoting this product.

1.3.3. 英語母語変種の語の意味が拡大されて用いられている語

1.3.2とは逆に、英語の標準母語変種の語がSEでは意味が拡大されて用いられている場合がある。たとえば、fellowは標準母語変種では一般に男性に対して用いられる語であるが、SEでは（51）に示されているように、男性だけでなく女性にも使われる（Wee, 1998）。また、（52）のように、sendには「人を送って行く」という意味がある。標準母語変種でも小さな子どもや目下の人に対してはこの意味でsendが使われるが、SEでは年齢や立場に関係なく用いられる（本名他, 2002）。さらに、標準母語変種ではstayとliveは意味が異なるが、SEではstayがliveの意味ももち合わせている。たとえば、

(53)、(54) のstayは「一時的に滞在する、泊まる」という意味ではなく、liveの意味で用いられている (Platt and Weber, 1980) (Wee, 1998参照)。

(51) She's a nice *fellow*.
(52) I'll *send* you home tonight.
(53) We *stay* upstairs.
(54) My wife's sister is *stay*ing in Jurong.

2. シングリッシュに対する言語態度と"Speak Good English"運動

2.1. シングリッシュに対する政府の言語態度

前項では口語シンガポール英語の発音、文法、語彙について述べたが、口語シンガポール英語は特に発音と文法において標準イギリス英語や標準アメリカ英語等の標準母語変種とはかなり異なることがわかる。前稿 (小野, 2006) でも述べたように、この口語シンガポール英語、いわゆるシングリッシュに対するシンガポール政府の姿勢はきわめて否定的であり、1999年8月に行われたナショナル・デー祝賀会でのスピーチで、当時の首相ゴー・チョクトン (Goh Chok Tong) は、国民がシングリッシュを話す限り、シンガポールは世界第一線の経済国になることも世界に進出することもできないと述べ (Rubdy, 2001)、シングリッシュを若い世代が使わないようにすべきであると強調した (Wee, 2004a)。

また、31年間首相を務め、政府に対して強い影響力をもつ当時の上級相リー・クアンユー (Lee Kuan Yew) もシングリッシュをシンガポールの経済成長を妨げる「障害 (handicap)」と呼び批判している。彼はテレビのコメディー番組がシングリッシュを後押しし、シンガポール人に適切な英語を話す必要はないと誤解させていると述べている。彼が特に非難した番組は *Phua Chu Kang Pte Ltd.* (『プア・チュカン』) である。この番組は、粗野で教養はないが、愛嬌のある企業経営者プア・チュカンがシングリッシュを

ユーモアたっぷりに連発する連続コメディーで、主人公プアやプアのキャッチフレーズともいえる“Don't pray, pray”（「まじめにやれ」「冷やかすな」という意味で、playがprayと発音されている）で人気を博し、シンガポールのテレビ局TCS（Television Corporation of Singapore）において最も高い視聴率をあげたが、シンガポールの若い世代の英語に悪影響を及ぼしているとしてリー・クアンユーに非難されたのである（Rubdy, 2001）。そしてリー・クアンユー（本名, 2003: 61-62より引用）は、1999年のナショナル・デー祝賀会でシングリッシュ及びシングリッシュの普及を後押しするマスコミに対して次のように述べている。

> The more the media makes Singlish socially acceptable, by popularising it in TV shows, the more we make people believe that they can get by with Singlish. This will be a disadvantage to the less educated half of the population.
> （メディアがテレビ番組などでシングリッシュを広め、社会がこれを容認するようになると、国民はシングリッシュだけでやっていけると感じるようになります。これは国民の半分にあたる教育を十分に受けていない者にとって、不利をもたらすことになるでしょう）

リー・クアンユーによると、教養のある人であれば、標準シンガポール英語とシングリッシュを場面や状況に応じて使い分けることができるが、十分に教育を受けていない国民の半分はテレビ番組等の影響でシングリッシュだけを話すようになり、経済においても不利益をこうむるという。そして、インターネット時代の今、国民は標準英語を話すべきであると主張したのである（「“シングリッシュ”追放へ」, 2000年1月22日）。

上述のゴー・チョクトンも、若者が*Phua Chu Kang Pte Ltd.*の主人公プアの話し方を「かっこいい」と思わないように、プアにシングリッシュを断つように勧告した。TCSはこれを受けて番組のシリーズを終了させた後、プアが標準英語を学ぶために語学教室に通うこと、そして次のシリーズではプア

がシングリッシュの使用を控えることを発表したのである（Rubdy, 2001）。

2.2. “Speak Good English” 運動

1999年のナショナル・デー祝賀会でのゴー・チョクトンやリー・クワンユーのスピーチがきっかけとなり、翌年の2000年4月29日に、シンガポール人がシングリッシュの使用をやめ、標準英語を話すようになることを目的とした“Speak Good English”運動（Speak Good English Movement：正しい英語を話す運動）が始まった（Rubdy, 2001; Wee, 2004a）。この運動では“Speak Well, Be Understood”（正しい英語を話し、世界の人々に理解してもらおう）というスローガンが掲げられた。これにより、教育省は英語教育の活性化を目指し、英語のシラバスの改訂を行ったり、小学校の教員及び中学校の英語教師計8,000人に最新の方法で文法の指導ができるよう60時間の講座を受けさせたりした（Rubdy, 2001; 本名, 2002, 2003;「“シングリッシュ”追放へ」, 2000年1月22日）。そして、シングリッシュは多くの新聞の社説、漫画、寸劇、コマーシャルにおいて、標準英語よりも威信が低く、魅力がないことばとして扱われるようになった（Rubdy, 2001）。

2.3. シングリッシュ擁護論

政府のこうした動きに対して、シンガポール人によるシングリッシュを擁護する議論は以前よりもさかんになっていった（本名, 2002, 2003）。次の抜粋は、“Speak Good English”運動の施行が決定された1999年にある政府系のホームページに寄せられた意見である。

> English differs from place to place. American English is different from Oxford English, and there are many different dialects in UK. So why the Singaporeans can't speak their own English?
> （英語は地域によっていろいろと違います。アメリカ英語はオックスフォード英語

と違うし、イギリスにもたくさんの方言があります。なぜシンガポール人が独自の英語を話してはいけないのでしょうか)

(本名, 2003: 63-64より引用)

また、1999年のナショナル・デー祝賀会でのゴー・チョクトン及びリー・クワンユーのスピーチの後、新聞にも多くの意見が寄せられた (Rubdy, 2001)。次の二つの抜粋はシンガポールの英字紙*The Straits Times*に寄せられた読者の意見とそれに賛成する別の読者の意見である。

Singlish is Singapore. It is part of our national consciousness. Social cohesion, which our leaders are attempting to foster, is already there for us to exploit in Singlish.
(シングリッシュはシンガポールそのものです。それは私たちの国民意識の一部なのです。私たちの指導者が促進しようしている社会的団結、それは、シングリッシュの利用によってすでに達成されているのです)
(Anthony Yeo, *The Straits Times*, 7 September 1999) (Rubdy, 2001: 347より引用)

Speaking standard English in this era of globalization is absolutely essential, but Singlish identifies us and bonds us as Singaporeans. This special 'language' should not be forsaken but instead, as Mr. Yeo suggests, be exploited as a tool for social cohesion.
(標準英語を話すことは、このグローバル化時代において絶対的に必要ですが、シングリッシュは私たちシンガポール人のアイデンティティーを育み、私たちをシンガポール人として一つにしてくれています。この特別な「言語」は切り捨てられるべきではなく、Yeo氏が言われているように、社会的団結のための手段として活用されるべきです)
(Harry Chia Kim Seng, *The Straits Times*, 8 September 1999) (Rubdy, 2001: 347より引用)

さらに、*The Bondmaid*や*The Teardrop Story Woman*で知られるシンガポール人作家キャサリン・リム (Catherine Lim) (本名, 2003: 64より引用)

も雑誌のインタビューで次のように述べ、シングリッシュを擁護している。

> I need Singlish to express a Singaporean feeling. If I'm speaking with my Singaporean friends, I don't speak colonial English. I'd feel so false.
> (シンガポール人の気持ちを表現するのにはシングリッシュが必要です。シンガポール人の友人との会話では入植者の英語は話しません。本当の自分が出せないのです)

2.4. "Speak Mandarin" キャンペーンと "Speak Good English" 運動

シンガポール国民の統合を図る言語として、異なる母語を有し、異なる伝統をひいているシンガポール人の超民族的アイデンティティーを養う言語として英語を選択し、教育媒体の第一言語に指定したのはまぎれもなくシンガポール政府である（Ho and Alsagoff, 1998; Rubdy, 2001)。政府のねらいどおり、英語は学校の授業外でも話されるようになり、シンガポール人の家庭にまで浸透していった（Wee, 2004a; 本名, 2006)。2000年の国勢調査（Department of Statistics, Singapore, 2001）によると、家庭で英語を話す人は人口（5歳以上）の23%に及び、1980年の11.6%（本名, 2006）と比較すると20年で倍増したことになる。ただ、政府の思惑どおりにいかなかったのが、そこで話される英語が多くの場合、標準シンガポール英語ではなく、シングリッシュであったということである（本名, 2006)。皮肉なことに、上述の*The Straits Times*に寄せられた二人の読者の意見にもあるように、政府のねらいは、政府が "Speak Good English" 運動によって排除しようとしているシングリッシュによって達成されたといえるのである。

Rubdy（2001）は、"Speak Good English" 運動について、1979年に当時の首相リー・クアンユーによって施行された "Speak Mandarin" キャンペーン（Speak Mandarin Campaign：標準中国語を話すキャンペーン）がもたらした結果と同様のことが起こるかもしれないと述べている。"Speak

Mandarin" キャンペーンは民族ごとに共通語を統一する政策の一環として実施されたが、リー・クアンユーは、国民の共通帰属意識を育てるには、特に中華系シンガポール人の共通語が必要であると判断した。そして、中国語の様々な地域変種を母語として有する中華系シンガポール人同士のコミュニケーションを円滑にするために、標準中国語（マンダリン）を中華系シンガポール人の共通語に定め、「方言をやめて、標準中国語を話そう」というスローガンを掲げてキャンペーンに乗り出したのである（太田, 1994)。このキャンペーンは、5年以内に若年層の中華系シンガポール人が標準中国語を話せるようになること、10年以内に喫茶店やフードセンターでの使用言語が標準中国語になることを目標にして進められた（Kuo, 1984）（大原, 2002参照)。このキャンペーンは効果をあげ、キャンペーンの施行から10年後の1989年には10歳から15歳の中華系シンガポール人の8割以上が標準中国語を話せるようになったといわれている（大原, 2002)。中華系シンガポール人全体をみても、標準中国語の使用者数は確実に増加し（小山, 1991）（太田, 1994参照)、中国語の地域方言使用者数が減少していった（Rubdy, 2001)。このキャンペーンの結果と同様に、"Speak Good English" 運動の結果、標準英語の使用者数が増加し、シングリッシュの使用者数が減少する可能性があるとRubdy（2001）は考えるのである。

シングリッシュの排除を目指し2000年4月に政府が始めた "Speak Good English" 運動からまもなく8年が経過しようとしている。上述のRubdy（2001）の予測について結論を出すには時期尚早であるが、目下のところシングリッシュは健在で、2007年10月の時点でシングリッシュが連発されているテレビドラマが放映されており（田嶋, 2007)、政府の指導により主人公プアが標準英語を話すようになって視聴率が低下し、放送が打ち切りになったといわれる*Phua Chu Kang Pte Ltd.*（大原, 2002）も再放送され、好評を博している（田嶋, 2007)。

おわりに

本稿では、「シングリッシュ」として知られている口語シンガポール英語の発音、文法、語彙の特徴を挙げるとともに、シングリッシュの排除を目的として政府が推進している "Speak Good English" 運動について考察した。標準シンガポール英語は発音と一部の語彙を除き、標準イギリス英語や標準アメリカ英語等の標準母語変種とほとんど差がみられないのに対し、口語シンガポール英語は標準母語変種とは発音、文法において著しく異なる。世界第一線の経済国を目指し経済発展に力を注ぐシンガポール政府は、この変種の普及がそれを脅かしていると考え、国民がシングリッシュを話すのをやめ、標準英語を話すようになるように、"Speak Well, Be Understood" をスローガンに掲げた "Speak Good English" 運動を2000年4月に開始した。政府は国民に平等の機会を与え、異なる言語、異なる文化や伝統を有するシンガポール人の超民族的アイデンティティーを養い、シンガポール人として国民が一つにまとまるようにするために、英語を教育媒体の第一言語に指定した（Ho and Alsagoff, 1998）。この政策が功を奏し、英語は確実にシンガポール人の言語となったが、それは標準英語とはほど遠いシングリッシュであった。シンガポール人としてのアイデンティティーを育み保持する役割を担うシングリッシュと世界第一線の経済国となるために必要不可欠の標準シンガポール英語のどちらを優先させるべきであるのか、この二つの共存をどの程度まで許容していくべきであるのか、このような問題はシンガポールに限らず、多くの言語社会が大なり小なり抱えていることであり、慎重な態度での議論が必要であろう。

本稿では前稿に引き続きシンガポールの英語について考察したが、Outer Circle [2)]に属するシンガポールの英語やOuter Circleの英語事情をより深く理解するためには、シンガポール人作家による英語で書かれた文学作品の研究が今後必要であると思われる。

注

1) Brown and Levinson (1987/1978) は、人間は皆「積極的フェイス (positive face)」と「消極的フェイス (negative face)」と呼ばれる二つの願望をもっており、積極的フェイスは、自分の望みが、他の人にも望ましいことであると思われたいという願望を指し、消極的フェイスは、他の人に自分が自由に行動することをじゃまされたくないという願望を指すと述べている。言い換えると、積極的フェイスは他の人によく思われたい、認められたいといった願望で、消極的フェイスは人から干渉されたくない、抑えつけられたくないといった願望ということになる (Thomas, 1995)。これらの願望を脅かす行為を「フェイスを脅かす行為 (face-threatening acts)」という (Brown and Levinson, 1987/1978)。積極的フェイスを脅かす行為には、相手に同意しなかったり、相手を批判したり、軽蔑したり、侮辱したりすることなどが含まれ、消極的フェイスを脅かす行為には、相手に何かを指図したり、頼んだり、提案や忠告をしたり、催促したりすることなどが含まれる (Brown and Levison, 1987/1978; Thomas, 1995)。

2) Kachru (1992, 1996) は、世界の英語をInner Circle, Outer Circle, Expanding Circleの三つの圏 (Three Concentric Circles of Englishes) に分類している。Inner Circleとは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなど、英語を第一言語としている国や地域を含む圏のことをいい、Outer Circleは、インド、シンガポール、フィリピン、ナイジェリア、タンザニアなど、英語を第二言語として使用している国や地域を含む圏のことをいう。Outer Circleには主としてイギリスやアメリカの植民地であった国々が属しており、英語は旧宗主国の統治下にあった時代から公用語として使用されている場合が多い。Expanding Circleとは、英語を外国語として使用している国や地域を含む圏のことで、この中に日本、中国、韓国、インドネシアなどの国々が含まれる。

参考文献

Alsagoff, Lubna, and Ho Chee Lick (1998) The grammar of Singapore English. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng. 1998. *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 127-151.

Bao, Zhiming (1998) The sounds of Singapore English. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng. 1998. *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 152-174.

Brown, Penelope, and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge: Cambridge University Press. First published 1978 as part of Esther N. Goody (Ed.): *Questions and Politeness.*

Department of Statistics, Ministry of Trade and Industry, Republic of Singapore (2001) Census of Population 2000. [WWW document]. Retrieved: http://www.singstat.gov.sg/pdtsvc/pubn/cop2000r2.html

Ho, Chee Lick, and Lubna Alsagoff (1998) English as the common language in multicultural Singapore. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng. 1998. *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 201-217.

Kachru, Braj B. (1992) Teaching world Englishes. In Kachru (Ed.) 1992. *The Other Tongue: English across Cultures.* 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 355-365.

Kachru, Braj B. (1996) Norms, models, and identities. *The Language Teacher.* [WWW document]. Retrieved: http://www.jalt-publications.org/tlt/files/96/oct/englishes.html

Richards, Jack, John Platt, and Heidi Weber (Eds.) (1985) *Longman Dictionary of Applied Linguistics.* London: Longman. [ジャック・リチャーズ, ジョン・プラット, ハイディ・ウェーバー編.『ロングマン応用言語学用語辞典』山崎真稔, 高橋貞雄, 佐藤久美子, 日野信行訳. 南雲堂. 1988.]

Rubdy, Rani (2001) Creative destruction: Singapore's Speak Good English movement. *World Englishes*, 20: 341-355.

Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics.* London: Addison Wesley Longman. [ジェニー・トマス.『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』浅羽亮一監修. 田中典子, 津留崎毅, 鶴田庸子, 成瀬真理訳. 1998. 研究社.]

Wee, Lionel (1998) The lexicon of Singapore. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng. 1998. *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 175-200.

Wee, Lionel (2004a) Singapore English: phonology. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (Eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool.* Vol. 1. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1017-1033.

Wee, Lionel. (2004b) Singapore English: morphology and syntax. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (Eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool.* Vol. 2. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1058-1072.

本名信行（2002）「シンガポール〔共和国〕—英語は第1公用語」本名信行編著. 2002.『事典アジアの最新英語事情』大修館書店. pp. 67-82.

本名信行（2003）『世界の英語を歩く』集英社.

本名信行（2006）『英語はアジアを結ぶ』玉川大学出版部.

本名信行, 田嶋ティナ宏子, 榎木薗鉄也, 河原俊昭（編著）（2002）『アジア英語辞典』三省堂.

石黒昭博(編)（1992）『世界の英語小事典』研究社.

小野礼子（2006）「シンガポールの英語（1）—英語重視の二言語政策とシンガポール英語—」『神戸海星女子学院大学研究紀要』第45号, 15-30.

大原始子（2002）『改訂版　シンガポールの言葉と社会—多言語社会における言語政策』三元社.

太田勇（1994）『国語を使わない国—シンガポールの言語環境』古今書院.

「“シングリッシュ” 追放へ—シンガポール　ネット時代に対応」（2000年1月22日）『朝日新聞』p. 8.

田嶋ティナ宏子（2007）「シンガポール・レポート」『日本「アジア英語」学会ニューズレター』第23号, 5.